

# 人間失格

映画文学人生論

原作：太宰治 (1947年)「展望」

監督：荒戸源次郎 (2010)

出演：大庭葉蔵 生田斗真 脚本：浦沢義雄 鈴木棟也  
堀木正雄 伊勢田友介 撮影：浜田毅  
常子 寺島しのぶ 音楽：中島ノブユキ  
ひらめ 石橋蓮司

恥の多い生涯を送って来ました

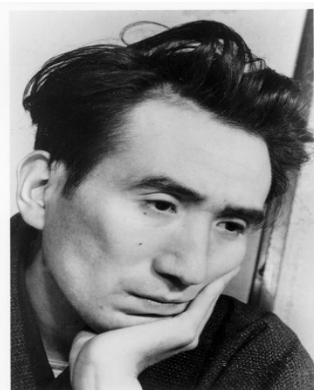
太宰治の作品をはじめて読んだのは十九歳のとき。やっと自分にもわかる文学と出会ったと嬉しくなり、二十数巻ある全集をぜんぶ読破した。しかし、「生まれてすみません」とか「恥の多い生涯を送ってきました」とか書くような作家の全集を読んだって自慢にはならない。恥ずかしくて人には言えなかった。

私の場合は半世紀前のことだが、不思議なこと  
に今の若者の間にも愛読者がいる。三鷹の禅林寺  
には墓があり、六月十九日の桜桃忌には全国から  
人間失格予備軍のファンが集まってくるという。

太宰治が愛人の山崎富栄と玉川上水に入水した  
のは昭和二十三年六月十二日深夜だが、遺体があ  
がったのは九日後の六月十九日。たまたまその日  
が誕生日だったので、「桜桃忌」と名付けられ、  
俳句の季語になった。

二〇〇九年は生誕百年ということで、作品がい  
くつか映画化された。そのうち『人間失格』の監  
督は荒戸源次郎、主演は生田斗真。映画も面白い  
けれども、原作を読んだときに感じる微妙な内面  
的心理の働きが映画を観て感じる印象とかなり違  
うような気がする。

たとえば、主人公の大庭葉蔵が子供の頃、「生  
まれてすみません」と言っているが、いくら早熟  
でも、少年がこんなセリフをつぶやくといかにも  
不自然という気がした。



# 人間失格

映画文学人生論

実はこのセリフは『人間失格』ではなく、『二十世紀旗手』のタイトルにつけられている。大庭葉蔵のセリフとしても不自然ではないが、子供の頃の葉蔵のセリフとしてはおかしい。

原作には葉蔵の幼少の頃の思い出として次の描写が紹介されている。

自分の田舎の家では、十人くらいの家族全部、めいめいのお膳を二列に向い合わせに並べて、末っ子の自分は、もちろん一ばん下の座でしたが、その食事の部屋は薄暗く、昼ごはんの時など、十数人の家族が、ただ黙々としてめしを食っている有様には、自分はいつも肌寒い思いをしました。

また、「自分は、肉親たちに何か言われて、口応えした事はいちども有りませんでした」と葉蔵は述懐している。私にも覚えがあるが、こういう経験をした子供なら、大人になってから愚かな諸行を繰り返して、周囲の人々に迷惑をかけ、「生まれてすみません」と口走るかもしれないが、少年時代には言わないのではなからうか。

『人間失格』はこれまでもなんどか映画化されているが、映画という形式では成功しにくい文学作品だと思う。

野暮いってすみません 桜桃忌